

# エミレーの鐘

森岡 稔

## 《目次》

韓国修学旅行  
金恩淑からの手紙  
弥勒菩薩  
エミレーの鐘  
菩提

## 韓国修学旅行

群山を出発した修学旅行団は、慶州に向かった。修学旅行というのは、韓国修学旅行に限らずバスに乗っている時間は長い。たいていの生徒は、前夜に消灯後も騒いでいるためバスの中では、もっぱら寝ていることが多い。

もう十月末なので韓国は秋の中にも冬の色合いを覗かせていた。韓国修学旅行に来て、もう三日目。天野次郎は、体も神経も疲れ果てていたが緊張を緩めなかった。放っておいたら何をするかわからない男子校生徒を引率する教師に、疲れを感じている暇などないからである。

天野の勤務する徳川学園高校で、修学旅行に韓国が選ばれてから、三回目である。韓国は天野にとって初めての訪問地であった。それだけに生徒と同じように新鮮な気持ちでガイドの説明に耳を傾けていた。この韓国修学旅行の日程は3泊4日である。

1日目＝名古屋・・・ソウル金浦国際空港・・・ ソウル・・・景福宮・・・ソウル泊
2日目＝ソウル・・・戦争記念館・・・水原民族 村・・・儒城泊
3日目＝儒城・・・群山・・・群山市内・・・慶州 泊
4日目＝慶州・・・仏国寺・・・天馬塚・・・慶州 国立博物館・・・釜山金海空港・・・名古屋

名古屋からソウルまで二時間足らず。何とも近い外国である。三日目に、さして観光とも言えないところの郡山に立ち寄るのは徳川学園高校と姉妹校提携をしている韓国の高校との国際交流をするためである。バスは、ソウルオリンピックで整備されたという高速道路を、日本では考えられないくらいのスピードで疾走していた。

移動中のバスで、眠りこけている生徒たちの代わりに、生まれつきサービス精神旺盛な天野は、バスガイドに必要ともそうでないとも思われることを話しかけることにした。バスガイドは、うりざね顔の美人である。天野は同僚の教員から、韓国のバスガイドが大学卒のエリートだと聞かされていた。

なるほど、これほど日本語が達者なのだから学識があるに違いない。天野のクラスのバスはD組だから4号車。ガイドの名前は金恩淑といった。ソウルに着いたときに自己紹介でその名前を知った。天野は、修学旅行関係のメモを熱心に確認していた金恩淑に話しかけた。

「あとのくらいで慶州ですか」

バスガイドは、道路状況からみてどのくらいかかるかを憶測できた様子であった。だが、正確さを期するには、やはり運転手に聞かなければならない。すぐに金恩淑は運転手に同じことを韓国語で早口で聞いた。その答えを天野に伝える。

「1時間くらいと運転手は言っています」

天野が、慶州までの時間を聞いた地点は、ちょうど大邱あたりであった。金恩淑は、思い出したように立ち上がって説明をし始めた。

「あと1時間くらいで慶州に着きます。今バスが通過しているのは大邱というところ、大邱はリンゴの産地として有名です。また美人の産地としても有名、韓国の男の人、大邱の女の人と結婚しがります」

もう一言何か言いたそうであったが躊躇して結局、それを言わずにガイドは着席した。そのガイドの様子を見てとった天野が、小声で聞いた。

「何かもう少し言いたそうでしたね」

「えっ、わかりましたか」

ガイドは、何か照れくさそうにしている。

「何を言おうとしていたのですか」

まだ隠しているガイドに天野は大体察していたことを言ってみた。

「あなたも大邱出身なんでしょう」

ガイドは、にこっとした。それが、答えだった。

「あなたは日本語が上手ですね。どうやって勉強したのですか」

お世辞ではなく天野は金恩淑の日本語が本当に堪能だと思った。金恩淑は、何から話そうかと少し上を向いて思案し、おもむろに答え始めた。

「大学の日本語学科を卒業しました」

「大学の日本語学科といっても専門として勉強するのは二年程でしょう。すごいですね。」

僕なんか中学もあわせると英語を十年は勉強したのに、ろくにしゃべれないんだから」  
金恩淑は、微笑んでいた。

「衛星放送を使って勉強しました。大きめのパラボラ・アンテナを上げておくとなHKの衛星放送をきれいに受信します。日本語を勉強するのに最適です」

天野は、金恩淑の勉強している姿を想像した。

とっくりセーターをきて背伸びをしながら勉強疲れを癒している。机にはかわいらしいマスコットが載っている。窓にはピンクのカーテンが掛けられていて……。

しかし次の瞬間、バスガイドをしているとき以外の金恩淑のそんな様子を勝手に想像するのは、何かいやらしい気持ちが出て、天野は頭に描いた光景を黒板消しで急いで消すように拭き去った。

程なく、バスは慶州についた。『ビビンバップ』という焼肉丼のようなものをレストランで食べたあと、慶州の観光が始まった。

「慶州はちょうど日本の奈良といったところにあたるでしょう」

バスガイドがまず、通り一辺倒の説明をした。

確かに多くの日本人の大半は慶州を訪れると奈良に来たかのような感じを受けるといふ。もちろん飛鳥、奈良は、慶州の『風水地理』に則って都づくりしたとも言われるので似ているのも、当然といえば当然である。また、韓国語で『ナラ』は『国』を指すという話もある。

慶州国立博物館に到着した。天野のクラスも含めて修学旅行団は、カルガモの子供が親鳥のあとについていくように、バスガイドの後にくっついて行った。

それぞれのクラスの生徒は各号車のバスガイドから、入り口の比較的近くの日本にも稀であると思われる大きな美しい梵鐘についての説明を聞いている。中でも4号車の金恩淑の流暢な日本語による梵鐘の説明は、ときおり聞こえてくる他の号車の説明よりもわかりやすいように天野には思えた。

「これは聖徳大王神鐘（エミレーの鐘）です。この梵鐘には悲話が伝えられています。梵鐘はそもそも、新羅三十五代景德王が亡き父の聖徳王の菩提を弔うために鑄造を思い立ったものです。鑄造をつくるように命を受けたある工匠が何十回もつくろうと試みたのですが、なかなか完成しませんでした。そんなある日、工匠の夢に神仙が出てきてこう言います。『九歳の子供を生け贄にすれば鐘は完成する』工匠からその話を聞いた僧侶が托鉢にでかけ、ある家を訪ねると、『わたしには何もお坊さまにさしあげるものはございません。さしあげるとすれば、この子ぐらいなもので……』と冗談まじりに言ったのです。例の工匠から話を聞いている僧は、もちろんこれを冗談とは受け取りません。いたいけな少女を連れて行き、煮えたぎる釜の中に僧の読経とともに投げ込みました。そして、初めて梵鐘は完成したのです。しかし、それ以来鐘について鳴らすと、その音色は『エミレー（お母さん）』と叫ぶように聞こえると言い伝えられています」

そういう説明がちょうど終わったぐらいのところで、すでに説明を聞き終わっていた他のバスの生徒がエミレーの鐘をついた。そんな悲話があるのなら遠慮するようなものなのに、生徒はちっともかまわない。

釣鐘をみると自然にどんな音が出るのか試してみたくなるものだと思われ、天野は生徒の無邪気さが悲話とは無関係であることに一種のおかしさを覚えた。

おかしく思えたという「不遜な」気持ちとは裏腹に、天野は、実際に聞こえる蕭々と鳴り響くの音色の美しさにうたれ始めていた。なにか泣きたいような気持ちである。天野は少々、当惑していた。

《いったい、どうしたんだろう。鐘の音など珍しくないじゃないか。俺らしくもない。この鐘にまつわる悲話を聞いたぐらいで、これほど感傷的になってしまとは……。それにしても、この鐘の音を聞くと、何か言い知れない慈悲とでもいうような心情が伝わってくるようだ》

天野は、もう当惑することをやめて、感動にうちひしがれるままにした。

音が鳴り止むと天野は、今度は梵鐘の外の形象をつぶさに見ることにした。

梵鐘の形は、素人目から見ても、流麗さを誇っている。パンフレットに梵鐘の表面に彫刻されているものは、飛天像だと書かれてある。天女とされる娘が膝を屈して、両手を何かを受けるようにして掌を上になっている。背景にある流れるように描かれている雲は、まるで炎のようだ。ガイドの説明を聞いたあとの天野には、まるでその梵鐘の表面に描かれている天女の姿が、生け贄になった少女を刻んでいるものに思えてならなかった。

修学旅行の行程を終え、修学旅行団は、釜山の金海国際空港を飛び立ち、名古屋空港に帰ってきた。

翌日は、修学旅行で費やされた日曜の代休になっていた。家族には、いろいろな土産話をしたが天野はあえてエミレーの鐘の話はしなかった。軽々しく話題にしてはいけない気がしたのである。天野の心の中に、ある『ひっかかり』があった。

それは何か。

もし、その少女が「エミレー」とただ叫ぶことで話が終わってしまえば母親はむごい仕打ちをしたことになる。母親に向かって発した少女の叫びが痛々しい。人身御供だけにとどまれば、日本にも中国にも人柱の話はいくらでもある。

しかし、この場合、炎熱の溶鉱の中に入れられたのは、いたいけな少女であるから陰惨な事この上ない。まして、梵鐘であるので本来、仏教が標榜する慈悲の精神に矛盾するのではないだろうか。ただ「かわいそうだったね」では済まされない深い意味が背景にあるにちがいないと、天野には思われた。

それから二カ月半ほどが過ぎたある日、自宅の郵便受けに韓国からの手紙が届いていた。天野は、封筒に貼られた見慣れない郵便切手をしばらく眺めたあと、ゆっくりと裏面の送り主の住所と名前を確かめた。

『金恩淑』とある。

天野は、すぐにその送り主の名前を思い出せなかった。記憶をたどって、《あっ、そうか！》と、天野は心の中で思わず叫んだ。

《あのバスガイドだ》

天野の高校では、修学旅行でお世話になったバスガイドに有志がお礼の手紙を書く習慣がある。天野も生徒と同じように手紙を送った。天野が送った手紙は、生徒の書く様な有りふれた御礼の手紙ではなかった。その文面には、例のエミレーの少女に対する想いと疑問が書かれてあった。

《なぜ、エミレーの少女は炎熱の溶鉱の中に入ってしまったのか。ただ、母親の言うことを唯々諾々として聞いただけなのか。何か深い理由があるのではないか》

そんなことをありったけ手紙に書き付けたのであった。お礼の手紙の多い中で天野の手紙はむしろ奇異に映ったのかもしれない。

金恩淑からの手紙は、日本人とも見まがうほどの綺麗な字で書かれてあった。

## 金恩淑からの手紙

「お手紙有り難うございました。早速お返事を書くべきであつたのですが、遅れて申し訳ありませんでした。多くの生徒様からお手紙をいただき、一つ一つにご返事を書かせていただきました。天野先生からのお手紙は私たちバスガイドにとって驚きでした。それは、日本人の方で、これほど真剣にあのエミレーの鐘についてお尋ねになった人は今までいらっしゃらなかったからです。それに、私たちも、つい見逃してしまいそうな事に興味をお持ちになっいらっしゃるからでした。さっそく、他のバスガイドに聞いてみましたが、よく知らないと言います。私の父母も祖父母も知らないと言うので、出身大学の先生にも電話をかけて聞いてみました。韓国の歴史について造詣の深い先生ですが、やはりエミレーの鐘について詳しい史料はないとのことでした。考えた末、天野先生が妙に思うかもしれない方法をとることにしました」

天野はドキドキした。大学の先生でも分からないことを知り得る妙な方法とは……。 「日本でもこんな時は霊媒とか巫女、口寄せとかいう人々に頼ることがあるそうですね。韓国にも巫堂と呼ばれる人たちがいます。実は私は巫堂の娘です。巫堂は世襲ですので、今でも母親が都合で出来ない時には、代わりに巫堂をします。韓国には三万五千人の巫堂がいます。ふつう霊を呼ぶ死霊祭は死後一、二年で行うものですが、今回は、随分昔の事ですから、村々の平安を祈祷するやり方を用いましょう。これにはパートナーがいります。つまり私が祈祷する際に後見を務める覲が必要なのです。具体的には巫堂が踊ったり歌ったりしている時に、杖鼓で拍子を取ったり、間の手を入れたりするのです。これは他の人ではだめで、当事者つまり祈祷を必要としている人

しかできないのです。本来は天野先生が、韓国においでになって覲をしてくれればよいのですが、そうもいかないものですから私が韓国から念を送ります。念を送るのは旧暦正月二日、新暦の一月二十八日の夜十時です。杖鼓とか銅鑼の音が必要ですが、鳴り物の代用として鍋の蓋でもかまいません。それを叩いてください。それから、そのとき部屋いっぱい造花をしつらえてください。造花の種類はできるだけ多く、色鮮やかなものをお願いします。テーブルの上にろうそくを一本立て、お神酒をお供えて下さい。私は踊り歌いながら念を日本にいる天野先生のところへ送ります。そうすれば、私か先生のどちらかに降霊するでしょう」

天野は、この手紙を読まなければよかったと思った。

《そんなことを急に言われたって、無理だ。冗談じゃない。そんな奇妙な事ができるわけ

がないじゃないか。第一、二十八日といえば明後日だ》

天野は、そう呟いた。

翌日、天野は授業をしていても、それが気になって落ち着かなかった。金恩淑からの手紙を無視しようにも、エミレーの鐘の真相を究明し始めたのは、ガイドではなく他ならぬ天野本人だったからである。

いよいよ二十八日になった。天野は結局、学校から帰る途中に色紙をどっさり買い込んだ。言われたとおりの造花をつくるためである。

「花の百科」といった本を見ながら見様見真似で、牡丹花・蓮華・菊・梅・絲圈花・がまずみ等を作った。

天野の妻が何をつくっているのか尋ねたが、

「何でもない」

と、天野は怒ったような返事をした。

「私、先に寝ますから」

そう言って寝室に行ってしまった。お互い干渉しないのが、よい夫婦だと思い込んでいる。さすがに鍋の蓋を叩く時には気が引けて、寝室まで聞こえない程度の音の大きさにとどめようと努力した。

《こういう時は何か経を読まねばならないのだろうか。しかし、相手は韓国から念を送っているいわばシャーマンだ。日本語のお経なんか役に立つわけがないだろうな》

何かをしなければならぬと思って、ふと壁に貼ってあるカレンダーの弥勒菩薩像の写真を眺めた。実は、この時のこの弥勒菩薩像を見ていることが韓国のシャーマンから送られてくる念を受け取るのに功を奏したのである。

言われるとおりに、長い時間やってみたが、何の現象も起こらない。

《何だ。何の変化もないじゃないか。それとも向こうの方に降霊したのだろうか。なんせ、あつちは専門家だからな……》

そう思うと、夥しい造花とぽつんと一本あるロウソクが、今では何か馬鹿馬鹿しいも

のに思えた。

天野は疲れたので、諦めて寝ることにした。妻の寝息が聞こえる。天野は寒いので身を縮めながら妻の隣の布団にもぐりこんだ。たぶん寝付きが悪いだろうと思ったが、予想に反してすぐ寝入ってしまった。すると、天野はその夜不思議な夢を見た。

## 弥勒菩薩

仏国寺の境内は、冬なのに今日は暖かい風を運んでいた。

地面に小枝で何かを模写していた敬美は、その絵が気に入らなかったのか、さっとそれを掻き消し、描き直しはじめた。十才にもならない敬美は小柄なので、いつも実際の歳より下に見られる。

境内の比較的土の柔らかいところでは、敬美の友達の子どもたちが石を支点にして板の両端を交互に飛び合って、跳躍を楽しんでいた。それは両班の子女の遊びが庶民にまで普及したものだった。

子どもたちの遊び場になっている仏国寺は、吐含山の中腹にある。七堂伽藍の柱や梁の丹青塗りは、鮮やかすぎるほどの色彩で人を圧倒するが、石塔や石段の素材である石の持つ柔らかさが、それをなだめていた。

統一新羅の慶州、時は恵恭王六年十二月(770年)であった。

前王、新羅三十五代景德王は、父の菩提を弔うため奉徳寺神鐘の鑄造を企図した。ところが、何度試みても鑄造は果たせず、それは三十六代恵恭王に引き継がれた。

恵恭王から、その神鐘の鑄造の総責任を任されたのは唯心という僧侶である。巨大な梵鐘ゆえ、なかなか完成を見なかった唯心は、日々苦慮していた。

この日、唯心は仏国寺を訪問していた。敬美が境内で遊んでいる時、唯心はちょうど寺の入り口の門に安置されている四天王に梵鐘の完成を祈願するかのように見つめていた。後に運命的な出会いをもつ敬美が同じ仏国寺にいる。そんなことを唯心が知るよしもなかった。

《景德王によって喜捨された四十二万斤あまりの黄銅を無駄にはできない。だがどうしても梵鐘ができない。私はどうしたらよいのだ》

自暴自棄ぎみになっていた唯心はある晩、妙な夢を見た。

神仙が夢に現れて唯心に言う。

「南川下流の村に金敬美という九つになる娘がおる。その娘は信心深く仏に仕える気持ちが強い。この娘を生け贄にして鐘の供養にすれば鐘は、たちどころに出来上がるであろう」

唯心は驚きのあまり目がさめた。首筋にじっとり汗が滲んでいた。

《恐ろしい夢じゃった。娘を生け贄になど、仏に仕える身でなせるはずがない。鐘があ

まりにも出来ないものだから、こんな恐ろしい夢を見たのだろう。それとも本当に仏がそのような娘をお召しになられているのだろうか》

翌日、半信半疑のまま唯心は、夢のお告げが本当かどうかを確かめるために伴の者、五人を連れて、南川下流の村へ出かけた。一応、托鉢の名目である。

唯心は金敬美という娘がいるかどうか、村のあちこちで聞いてまわった。すると、まさにその名の娘が実在しているということが判明したのである。

唯心は、驚いた。

《まさか。本当にいるとは……》

早速、金敬美の家まで行くことにした。

金敬美の家の前に来ると、あくまで托鉢であることを装って念仏を唱えながら、錫杖を鳴らした。唯心は、いろいろな思念が湧き起こってきて、半ば夢見心地で行動している。何かに駆り立てられているようでもあった。

《本当に娘がいたとして、唯心、お前は何がしたいのだ。ひょっとしたら、恐ろしいことを考えているのではあるまいな》

心の中のもう一人の唯心が責める。

外の錫杖の音を聞きつけて、女が戸を開けた。家屋全体は、決して裕福な方には見えないが、さすがに慶州という都の民家である。屋根は瓦葺きであった。屋根はそうでも、あまりよくない普請なので、女が戸を開ける時に、ぎしぎしと軋んだ。

唯心が覗き込むと、家の隅で娘が行儀よく座って手習いをしているのが見えた。

《あれが敬美なのだな》

すでに、この時にはもう、唯心の心の中には、良心との葛藤が無くなり、そのかわりに、娘を獲得する意欲だけが残っていた。

「まあまあ、こんなむさ苦しいところにお念仏をくださって。お寒うございませよ、どうぞ中へお入りくださいませ」

「では、お言葉に甘えて少しお邪魔いたしましょう」

といって、中に入った。総勢六人であるから、狭い家の土間は人間で見るまにいっぱいになった。敬美は、ちらっと唯心たちを見ただけで、そのまま手習いを続けている。「見たとおりの貧乏暮らし。それに冬でございます。お坊さまに差し上げるものなど何もありませんので困りましたこと。この子でもお寺に奉公させようかしら……」

女は、口に手を当てて笑った。

『差し上げる』『奉公』という言葉が唯心の心に突き刺さった。まるで心の中を見透かされたように感じて、唯心はいたたまれなくなった。

喉が緊張のために、からからに乾いた。緊張を気取られまいと思えば思うほど余計に声がうわずってしまいながらも、唯心はやっとの思いで切り出した。

「そ、それは殊勝なことです。ちょうど寺では奉公人を探していたところですよ。今からお連れ申しましょう」



「ええっ！ 何を急におっしゃいます。父親もまだ帰っておりませんし、第一、畑の手も足りなくなります。先程申しあげたことは冗談でございます」

母親は唯心の本当の計画がわからず、自分で言った事が、唯心に言質を取られたと単純に思って、いかにもうろたえた言い方をした。

「其方、奉公させると確と申したではないか」

唯心は、自分でも強引だと知りつつも必死でそう言い張った。

「支度をしなさい。敬美どの」

唯心は、逸る気持ちで敬美にそう促した。

「なぜ、この子の名をご存じで？」

唯心は狼狽した。確かに敬美の名を母親から一度も聞いていないのだ。

唯心は、これ以上の言い訳をすることをやめることにした。また、子どもの命をもらうという重大性に対し、『奉公』などにごまかすことはよくないと思い、本当の事を打ち明けることにした。

「真実の事を申そう。この子は仏様に召されておる。奉徳寺は知っておろう。私は唯心という者で、そこに安置するための鐘を鑄造しているが、何度造っても壊れる。どうしても出来上がらないのじゃ。そこで神仙より御託宣があり、その子を人身御供にすれば、間違いなく鐘ができあがるとおっしゃる。今日来たのはそういうわけじゃ」

「なにを御無体な。わが子を生け贄にする親がどこにおりましょう。そんな話を聞く耳はもちません。どうかお帰りください」

「褒美は充分取らせる。鐘の完成は王も心待ちにされておられる」

「褒美など要りません。この子は三つ上の兄との二人兄妹。共に、かけがえのない私の子どもです。金銀財宝をいくら積まれても、この子を渡すわけにはいきません」

母親の必死の抵抗に唯心は、怯んだ。唯心は全く気弱になってしまっていた。

すると唯心は、周りの気配から、『何をぐずぐずしておられるのだ』といった顔付きで唯心を急かすように見ている部下の僧侶五人に気が付いた。

唯心は背中を押されているような感じがした。そんな部下たちに虚勢をはって、唯心は今度は逆に、同行の僧たちに強く命じて言う。

「金敬美を連れて行きなさい。あとは私が責任を持つ」

「ははっー」

待ち兼ねたといった感じで敬美を担ぎ上げ、疾風の如く連れ去った。

「敬美……、敬美……」

母親が泣き叫び、唯心にすがった。唯心は顔を歪めながら、それを振り切って走り去った。いつまでも続く母親の悲痛な叫びは、村の空に木霊した。

やがて、父親の仙吉と桂成が、農耕からいつものように帰ってきた。

すぐに、泣き伏している母親の秋子に気が付くと、泣いている訳を問いただした。一部始終を聞いた仙吉は烈火のごとく怒った。

「何！そんな馬鹿なことがあるか。村主にも相談なしに娘を連れ去るなんて。よし、これから村主のところへ行ってくる」

そう言って仙吉は飛び出して行った。まだ大人のような行動力をもたない敬美の兄の桂成はどうしてよいか分からないでいた。

桂成は、泣いてばかりいる母親を慰めようとした。だが、飛び出す言葉は、慰めるところか母親を責めるものになってしまうのだった。

「どうして引き留めなかったんだよう、ねえ、どうしてだよ」

無力さを指摘されても、秋子にはどうにもならない。桂成と秋子は、ともにひたすら待った。

父親の仙吉が村主のところに相談に行ったものの、村主にしても文句を言う相手が身分の高い官寺であり、ひいては王の命令ともなれば従わなければならない。

仙吉ががっくりと肩を落として戻ってきたので、秋子や桂成にも希望が成就しなかったことはすぐにわかった。

家族に沈黙の時間が流れた。暫くして、桂成が思いついたように言った。

「おれ、月明様のところへ行ってくる。月明様なら、いい知恵をかしてくれるかも知れん」

「行くと言ったってもうお前、こんな夜更けだぞ」

仙吉が制止した。制止する一方で、仙吉にも月明なら何とかしてくれるような気がした。月明とはどんな人間か。

景德王十九年(761)四月に、太陽が二つ現れて十日間も消えなかったことがあった。天の異変は地上の政の異変につながる。王は早速、月明を呼んだ。そして、月明が天変の祓いをするために郷歌の兜率歌を作り散華の供養をしたところ、もとに戻ったという。

そんな月明であるので、月明老いたりと言えども、頼りがいがあるのは事実だった。月明は、王族や貴族に顔がきく一方で、民衆のためにも仏の道を説くという人物である。

「あのお坊様はいつでも相談に乗って下さる」

そう言って、さっき村主のところへ行った父親の姿さながらに、今度は桂成が飛び出して行った。

両親とも、桂成の成功を祈って桂成の後ろ姿に手を合わせていた。

月明の寺では夜更けというのに、まだ本堂に明かりが灯っていた。

桂成が耳を澄ますと、読経の音がする。寺で経の音がするのは何も不自然ではないのだが、読経の時間が問題だ。明かり障子越しに桂成が声をかけた。

「和尚様、和尚様、敬美のことでお話しがあります。桂成です」

経の音が、はたと止んだ。

「もうそろそろ来ると言うておった。敬美が連れて行かれたのであろう」

そう言いながら、扉がすうっと開いた。

「弥勒下生経という経を敬美のために誦んでおった。敬美は弥勒菩薩様に付いて上生するのじゃ、ありがたいことだ。まあ、上がりなさい」

上生だとか下生だとか桂成には何のことかさっぱりわからない。まして、月明は『ありがたい』などと言っている。

「お前は信じられんかもしれんが、これは敬美の運命なのじゃて。敬美は前世からの運命で弥勒菩薩様に召されて兜率天へ行くのだよ」

「何を言うとか俺にはわからん。もう少し解るように教えてくれよ。かあさまの話だと敬美を連れていったのは唯心というお坊様で、鐘を造るために敬美を生け贄にするのだとよ。和尚、何とかならんものか」

息急き切って桂成はそう言った。

「まあ、気持ちはわかるがそうあわてるな。なるべくお前に分かるように説明しよう。人間の住む欲界は、迷いの世界で人間は煩惱や苦しみにさいなまれておる。ところが極楽浄土に行けば、この生まれ変わりの苦しみから解かれて、煩惱も悩みもなく幸せに暮らせるのじゃ。浄土にはいろいろあってのう、兜率天はその一つじゃ。この兜率天では昔から仏となるべき弥勒菩薩が修行をなさっておられる。そこには光明で満たされ蓮華で彩られている宝宮がある。天女が宝玉を手にながら美しい音楽を奏でているという世界じゃよ。敬美は弥勒菩薩とともに、そういう世界へ行く……………」

「どんなに兜率天とか極楽がよい所だとしても、結局は死ぬってことだろ！ 敬美も俺たちとずっとこの先、一緒に暮らしていきえははずだ！」

桂成はだんだん激昂してきた。そんな桂成の様子を見て、月明は宥めるように、こう言った。

「死ぬということじゃないんだよ。そうではなくて、住むところを変えるだけじゃ。それも、兜率天という弥勒浄土じゃ。生きるとか死ぬということではなく、浄土へ仏に導かれて、そこに移り住むということじゃ。それに敬美は、のちにこの世にもどってくる」

「えっ！ 戻ってくる？」

月明の不思議な言い回しに桂成は当惑した。

「天界の兜率天で修行なされた弥勒菩薩様は五十六億七千万年後に、この世に下生なさる。この世そのものを浄土にするためにの。だから、弥勒菩薩様が下生なさる際に敬美はいっしょに戻ってくる」

「五十六億何千年だって？ 馬鹿馬鹿しい。そんな話信じられるかよ！」

「だから、生きるとか死ぬとかいうことでなく、住む世界を変えるのだと言っておる。何億年だろうと魂は消え去ることはない。敬美は兜率天で生きるということになるんだよ」

「何でもええ、俺は敬美を失いたくないだけじゃ！」

とうとう桂成は腹を立てながら泣き始めた。

「敬美は連れて帰れないんか！」

と、最後の抵抗をするように月明に言った。

「敬美はその弥勒菩薩様にお仕えしている眷属の天女じゃ。素晴らしい転生じゃのう。鐘の鑄造に供養されるのも幸せというものだよ。兜率天で弥勒菩薩様が説法を説かれている御側でお仕えするのだから。うらやましい限りじゃ」

そう言われても、やはり桂成は納得できない。どんなありがたい話も桂成にとっては、空説法だ。人間界しか知らぬ桂成には、敬美を助け出すことしか頭にない。

「人間死んだらおしまいだ。そんなこと、やっぱり俺、信じられねえ」

「菩薩はこの世の人々すべてを救う願をかけている。眷属である敬美はその願を成し遂げるために召されて上生していくのじゃ。菩薩も敬美も利他に徹している。やがて、この世に再び弥勒とともに下生してこの世を浄土となす。それを信じるのだよ、桂成」

桂成は項垂れた。

王族にも繋がりをもつ月明ならば救ってくれると桂成も家族も思った。ところが、頼みの綱の月明に相談しても埒が明かなかった。月明は、敬美がむしろ兜率天に召されて幸せなのだという。

桂成は夜空のどこに兜率天があるのか、うらめしく見上げながら帰途についた。

## エミレーの鐘

敬美は奉徳寺に連れていかれると、すぐに広い立派な部屋に入れられた。逃げないように後ろ手に縛られ、大きな体躯の二人の僧に見張られていた。敬美は、じたばたせず、静かに瞑想でもしているように正座をしていた。

なぜ敬美が神妙にしていたかという、実は理由があった。

敬美も一週間前に妙な夢を見ていたのである。枕元に神仙が現れて、  
「敬美よ、私は仏の使いじゃ。お前は日頃寺にまいってお祈りを捧げておるな。けなげじゃのう。初めて聞くと思うが、お前の前世は、弥勒菩薩が従えている眷属の一人だったのだ。いよいよ弥勒菩薩が兜率天に上生する時がきたので、菩薩がお前をお召しじゃ。後日、唯心という迎えの者が来るので、そのつもりでいなさい」

敬美は変な気がしたので、翌日、いつも話し相手になってくれる月明に相談をしに行った。月明は本堂で燈明をあげていた。

敬美は早速、前夜に見た夢の話をした。

「月明様、私は弥勒菩薩様に召されて天に昇るよう命じられているという夢を見ました。どういことなのでしょう」

「やはりな」

「やはりとおっしゃいますと」

「お前によく話して聞かしているように、弥勒菩薩様は仏様になろうと修行をなさっている

る」

話している傍らに、在家の衣服をまとい宝冠をかぶった弥勒菩薩像が柔和な表情をたたえて、半跏思惟の姿で鎮座している。月明は、話を続けた。

「弥勒菩薩様は幾度も兜率天に上生される。兜率天というのは幸福なお国でな。いつも妙

なる音楽が流れ、草花が咲き乱れまばゆいばかりの光が充溢しておる。弥勒様のところには皆が集まってお話を聞いておっての。天においても説法を続けていなさるのじゃ。そして、五十六億七千万年後に下生してこの世の衆生を救いに降りて来られるのじゃ」

「それで、わたしは何者なのでしょう」

「私は、いつかこの日が来ると思うておった。私はそう菩薩様から知らされていたからのう。お前が夢で言われたように、お前はもともと、その弥勒菩薩様のお付きの眷属なのだよ。お前が毎日のように寺に来て、この弥勒菩薩像や石窟庵の本尊を拝むのも、そういう因縁なのじゃ。そこで、弥勒菩薩様が、再び兜率天に上生する日が近づいたので眷属のお前も、お連れになるということなのじゃよ」

「私は死ぬのはいやです。お父やお母や兄者と別れるのはいやです。私の家は貧しいけれど家族は仲良く暮らしています。清らかでやさしげに微笑んでおられるこの弥勒様に魅せられてお参りさせていただいておりますが、兜率天がどんなに素晴らしいところであろうと、私はこの世に生きていとうございます」

「年若いのに、しっかりとした物言いじゃ。じゃがの、人間にはそれぞれ運命というものがある。清らかな魂を持った、お前のような者が弥勒様と上生し、天での弥勒様の説法をするのを補佐し、下生のときも添いとげ申し上げるのがそなたの運命なのじゃ」

「本当にそのような不思議な話があるのでしょうか。弥勒様はなぜ私などのようなものを召されるのでしょうか」

「前世からのそなたの辿る道は決まっておる。そなたは、もう何となく、分かっているはずじゃ。時々、そういう前兆があつたであろう」

「……………」

確かに、敬美には人に隠していた数々の神秘的体験があつた。

このように月明と話をしていたので、唯心が家に訪れた時も、実は、それほど敬美は驚かなかつた。来るものが来たといった感じであつたのである。

月明は、敬美の兄の桂成を説得して追い返したものの、やはりかわいそうに思つて翌朝、唯心を訪れた。月明は、仏門において唯心の先輩格にあたる。

月明は、唯心に一部始終を話した。そして、まずは、敬美を戻すように申し入れた。唯心は月明の話を驚きながら、なるほどそう言うことであつたのかと事情を把握した。その上で唯心は、敬美を戻すことをきっぱり断つた。

唯心は、それほど神鐘を造りあげるよう追い詰められていたのである。月明も月明で、俗界を超えたところで事が運ばれていることがわかっているので、唯心にそのように断られると、しかたがないといった様子である。もともと、敬美が弥勒菩薩の眷属であることを喜ばしいと思っているくらいの月明なのである。

唯心は、月明の話を聞きながら、敬美のことを思い起こしていた。  
《そう言えば、敬美の様子には菩薩の眷属を思わせるような気品のようなものがある…》

そして、唯心は月明の話によって、かえって救われたような気持ちになった。というのは、いくら仏からの託宣だとはいえ、いたいけな何の罪もない子供を捕らえて、炎熱の炉のなかに放りこもうとするのだ。もし、敬美が弥勒菩薩の眷属ならば、俗的な憐憫を乗り越えることができる。

月明との面会后、唯心は、敬美が捕らわれている部屋に現れた。唯心は敬美に対して神妙な気持ちになっていた。唯心は頭をたれて、  
「敬美様、お許しあれ。縛るなどして、手荒な事をしてしまいました。私の不徳のいたす  
ところです」

と、丁寧に言って唯心は部下に、縄を解くように命じた。  
「敬美殿、明夕境内にて炉を用意し神鐘の鑄造にとりかかります。あなた様が仏のお使いと知り、神鐘とともに上生化身されますことは当寺の誉れでございます。どうか気をお鎮めになり、弥勒様のもとへおなりあそばすようお祈り申し上げます」

この時すでに、敬美は真っ白な着物に着替えさせられていた。神々しい敬美を前にして恐れ入った唯心の恰幅のよい大きな体は、小さく縮んだ。  
「私はもう覚悟を決めています。というより私は、生前より選ばれしものとしての運命を知っています。私は兜率天に上生し弥勒様にお仕えします。この世に、私の分身となる神鐘ができあがれば、新羅ばかりでなく遍く韓半島安寧のための守護となるでしょう」

九歳の少女の言葉とも思えない荘厳な話ぶりに唯心は、改めてひれ伏した。

冬の夕方となると境内はやはり寒い。

ピーンと張り詰めたものが流れていた。境内の四方に赤い幕が張られ、七色の幡が懸けられていた。畳を敷き詰めた中央に大きな釜が置かれている。

除魔の御幣が微風で揺れていた。吹子で火力が強められた炭や薪の火が、釜の中の鉱物を溶解していた。釜の中のそれは、赤々としたマグマのようにぐつぐつと音をたてて煮えたぎっている。

その表面で、溶鉱からでた幾つもの火の泡が、パチンパチンと重く熱そうにはぜた。同時に、炎が舌なめずりをしているかのように踊っている。 真っ白な装束姿の敬

美は、綺麗に髪を結われていた。中央に置かれた釜まで、赤い敷物が、神殿に通ずる参道のように敷かれていた。

ゆっくりと、敬美がその赤い敷物の上を歩むと、敬美の素足は、釜を熱する炎の明かりに照らされて、白く美しく映えた。

敬美は釜近くの一畳ほどの桧板まで進む。板の上に、腰を少し浮かして足の指を立てるようにしながら跪いた。手を合わせて天を仰いでいる。

敬美が乗せられた桧板は中折れになっており、留め金をはずすと敬美が下に落ちる仕掛けになっていた。

頭に青い布を巻いた四人の青年が、胸に据えた小太鼓を叩きながら、敬美の周囲を踊り回った。お祓いの踊りである。その側では、杖鼓や銅鑼の音を鳴り響かせている男たちがいる。踊り終わると、銅鑼が大きく一度鳴らされた。

そして、三十名ほどの僧侶によって一斉に読経が始まった。噂を聞き付けた民衆たちは、境内に集まっていた。敬美の母、父、兄は、もちろん境内に居ることには居たが、敬美の決心が鈍らないために遠巻きに見るよう厳命されていた。

「過去諸佛姓字名号、弟子菩薩従多少皆悉知之……」

上生経ではなく、読み上げられたのは弥勒菩薩下生経であった。そもそも、上生の先の下生を新羅の人々は待ち望んでいる。神鐘があるところに弥勒菩薩と敬美は降り立つ。新羅の繁栄と安寧を願うがゆえに、下生の先取りをしているのである。

「一劫百劫若無数劫、皆悉觀察亦復如是……」

阿修羅像のような屈強な男が、神輿さながらに、板ごと敬美を持ち上げた。すると、微風であった風が、だんだん強く吹き始めた。風の音以外に聞こえるのは、読経の声ばかりである。経の節ごとに鳴る銅鑼が、人々の恐怖感をつのらせた。

俄に空が曇ってきた。風が更に強くなってきて、雷が遠くで鳴り始めた。しだいに、雷鳴が大きくなるにつれて、それに負けじと読経の声の音も大きくなった。稲妻が走って、ピシャ！というすごい音と共に雷が近くに落ちた。

「うおおっ」

塀の外の民衆たちは驚き叫び声を上げた。民衆たちが叫び声を上げたのは、雷の音に対してではない。稲妻が皆の目に、はっきりと竜の形に見えたからだ。民衆たちの心に、恐怖と畏怖が交錯した。

弥勒信仰と竜神とは密接な関係がある。弥勒菩薩の住む兜率天においても、竜神が七宝の垣に慈雨を絶えず降らしているという。

民衆は、竜神の神霊がまぎれもなく降りて来たと思い、がたがた震えてひれ伏した。

一心不乱に経を唱える境内の僧たちは、経典から竜神のことは知っていたが生まれて初めて竜の姿を目の当たりにするとさすがに、経の声音に乱れが生じた。しかし、僧たちは、すぐにもちなおして、竜神に対する畏敬の念からも読経に、一段と力を込めた。

「将来久遠弥勒出現、至真等正覺欲聞其變、弟子翼從佛境豐樂為經……」

風に煽られて寺の何枚かの屋根瓦が木の葉のように飛んで道に落ち、砕けた。

ついに敬美を乗せた板が、釜の上へ持ち上げられた。

読経の声が最大になったと同時に、留め金が外された。すーっと敬美の姿が釜の中に吸い込まれていく。

すると、炉を焚く炎の光が境内に張り巡らせた七色の幡にあたり、反射して敬美を七色の光りで包み込んだ。きらきらと輝いて敬美は釜の中へ降りて行った。まさに兜率天の入り口がそこにあるようだった。

すべてが終わった。

居る者すべての者から、嘆息とも、どよめきともつかない声が漏れた。竜は、いつの間にか雲間に消え去っていた。

稲妻と雷鳴が遠ざかると、釜を焚く火の音だけが、ぱちぱちと無情に聞こえ始めた。それまでは雷鳴と読経と興奮とが、火の音をかき消していたのだった。しばらく、読経は鎮魂のために静かに読み続けられた。

## 菩提

二年が過ぎた。

敬美の兄の金桂成は、十四歳になっていた。金敬美の菩提を弔うために今は月明のもとで修行する僧侶となっていた。ある時、桂成は月明に、こう話かけた。

「妹の敬美が天に召されてから二年になります。私は、菩提を弔うために毎日、経を読んでおります。月明様、どうかひとつ、妹のための郷歌を作っていただけませんか」「奇特なところがけじゃ。妹を偲ぶ気持ちは、ようわかる。共に冥福を祈ろうではないか。

私も近ごろ敬美を思い出すことがあって、先日こんな歌をしたためたのだ。詠んでみておくれ」

渡された紙に、美しい筆跡があった。

生死の路はとどめえず  
行くとも言えで逝くならめ  
秋告ぐ風に ここかしこ  
枝より落つる木の葉はも  
いずち行くやは知りがたし  
さあれ 行きつく果ては弥勒浄土  
また逢う日もあらめ



## 道を修めて期待たん

月明は、真剣に詠み上げる桂成の傍らで目を瞑って聞いている。

折しも、慶州の空に、奉徳寺神鐘がこの世の安寧を祈って、まさに浄土で鳴るような美しい音を響かせていた。

ふうっと大きな溜め息をつくともに、天野は夢から覚めた。

長い夢だった。

天野は、もうしばらく寢床にすることにした。いつもの天野は、夢を見ても大抵は覚えていない。しかし、昨夜見た夢は現実のことに思えるほど鮮烈によく覚えていた。

《そうか、そうだったのか。エミレーの鐘の少女は弥勒菩薩に召され上生するという『布施』の精神で、自ら進んで人身御供になったのか……》

夢と現実を一緒にするわけではないが、昨夜の夢は、自分の頭だけで作り上げた夢ではないように思われた。歴史的に現実にあった事を忠実に再現したに違いないと、天野は断言したかった。

何はともあれ、こうやってエミレーの鐘の謎が解明したのは、ガイドの金恩淑の祈禱のおかげであると天野は思った。

『布施』などという専門的な言葉が思い浮かんだのは、天野の勤める徳川学園高校が徳目として仏教を尊んでいたため、仏教のことを少し聞きかじっていたからである。

『布施』は、大乘仏教では、菩薩行であり「利他」の精神を表しているという。

エミレーの鐘の少女は、自己犠牲によって、衆生を救済するという「利他」に徹したと言えるのだった。

何やら憑きものが降りた感じで、天野は寢床から起き上がった。

天野は、いつもより早めに起きてしまったため、自分で簡単な朝食を用意した。台所のテーブルで、朝食をとっていると、天野の妻があとから起きてきて言った。

「あら、もう起きていらしたの？ それにしても、あなた、昨夜寝ている時うなされていたわよ」

「えっ、本当かい？」

と、天野はとぼけた。さもあらん、あんなにすごい夢を見たのだから……。

天野は、色紙で造花を作ったわけや鍋の蓋を銅鑼のかわりに叩いたことを、妻に秘密にしていた。なぜ、うなされていたか聞かれても、天野には、妻にエミレーの鐘について、もう一度最初から説明する意欲に欠けていた。

天野は、自分の書斎にもどった。韓国土産にと買ってきた奉徳寺神鐘のミニチュアが本棚の上にある。つくづくそれを眺めた。ミニチュアといえども、鐘の表面に刻まれた飛天像が精巧に作られている。やはり、慶州でもそう思ったように、優美な蓮華文や唐草文は炎のようにも見える。刻まれた天女の姿は、まさに敬美である。釣鐘の

上部に彫られた竜は、境内の上に現れた竜なのであろうか。

天野は、ミニチュアのエミレーの鐘に静かに手をあわせて、冥福を祈った。

(完)

## 参考文献

①三国史記 金富軾著 井上秀雄 鄭早苗訳注 (平凡社 1988)

②朝鮮の歴史と文化 姜在彦著 (明石書店 1993)

## 注

小説中の登場人物の内、王と月明だけが実在の人物である。月明の郷歌は、参考文献②の93頁を参照し、「弥勒浄土」となっていたところは、実際の詩では、「弥陀浄土」となっていたものである。